

# 法の水茎

高橋秀城

(66)

ハラハラと舞い散る木の葉のように、いつの間にか心が急かれる折節を迎えました。「昨日の淵」とながら「年の瀬」の流れのはやさを実感します。皆様にとつて、平成十九年はどのような一年だったでしょうか。立ち止まって後を振り返れば、嬉しかったことや悲しかったことなど、さまざまな思い出が浮かんで消えてゆきます。

月の光し  
清ければ  
影見し水ぞ  
まづ凍りける

（『古今集』不知）

（大空の冬の月が冴えて清らかなので、その月光を浴びた池の水が、真つ先に凍ったよ）

冬の夜空を見上げれば、澄み切った月が照り輝いているでしょう。地上に目を移せば、月に応えるかのように、池の水も凍り始めています。それは秋に月影を映し続けてい



木の葉が散り、季節の移ろいを感じる

た水だからこそ、冬の装いへと変わりゆく月の姿に、真つ先に気付いているのでしよう。仏教語に、この世の無常（移り変わり）を表す「水月」という言葉があります。冬の水面に宿る「凍った水月」を見てみると、月をもう逃がすまいとする水の思いが伝わってくるようです。

## 新しき年の光に

向かふかな  
師走の月の  
有明の空

（三条西実隆『雪玉集』）  
（新年の光へと向かうのだなあ。師走の月を残して明け行く空は）

十二月の異名である「師走」の由来には、師僧が東西を走る月（師馳す）の他にも、年が果てる（年果つ）や、春夏秋冬の四季の果てる月（四極）からとする説などがあります。慌ただしい師走を過ぎれば、いよいよまた新たな季節の到来です。来年は、今年以

上に良い年にしたいものです。

と、このようなことを書くとき、どこからともなく笑い声が聞こえてきそうです。「来年の事を言えば鬼が笑う」。本当は明日をも知れぬはずなのに、人はつい将来を思い浮かべてしまいます。そんな様子を見て、いつもは恐い顔をしている鬼たちも、笑い出してしまうのでしよう。大声で笑うことを「鬼笑い」とか「天狗笑い」と言いますが、この時期は至る所からカラカラと高笑いが轟いてきそうです。

ところで、「鬼」という言葉は、『古今集』「仮名序」に「目に見えぬ鬼神」とあるように、もともとは目に見えないもの（隠）を意味しました。それがやがて仏教や陰陽道と結び付き、地獄で亡者を叱り責める鬼（獄卒）となつていったと考えられています。では、この鬼が住むという「地獄」とはどのような場所なので

しよう。

「地獄」は、前号で取り上げた六道（六つの迷界）の最下層に位置しています。別名を「奈落」とも言い、「奈落の底」という言い方があるように、まさに「どん底」に当たります。

地獄の有様については、かつて「高尾山報」（六〇六号）の中で、行基菩薩に嫉妬して地獄に墮ちた智光という僧侶を取り上げましたが、その他にも、例えば次のような話が伝わっています。

今となつては昔のこと。蓮円という僧がいました。その母は邪見（間違つた考え）が深く、因果応報（日々行いの善悪によつて、その報いがあること）を知りませんでした。すると命が終わろうとしたときに悪相が現れ、三悪道（地獄・餓鬼・畜生）に墮ちて亡くなりました。

蓮円は嘆き悲しみます。何とかして母親の後世（来世）を弔おうと思ひ、

## 折り折りの記 (100)

波多野 重雄

### 故友逝きしを憶い出させる除夜の鐘

高尾山薬王院中興の祖、俊源大徳は京都の醍醐寺から来山された高僧で、八千枚の護摩供を修法して飯縄大権現を感得される。永祿年間の関東は武田・上杉・北条氏の三強で「戦神」、飯縄大権現を皆領地の境界線に祀る。

高尾山も八王子城の甲州街道の要衝。三十一世山本秀順御首は「殺生禁断の碑」の建立や、「四天王門」を落慶。現・大山隆玄御首も高尾山のミシュラン三ツ星人気を着々と実践。

年の瀬も薬王院の百八の煩惱を祓う除夜の鐘に、山麓の寺院も波の如く除夜の鐘をつらねる。鐘の余韻に故山に眠る友や朋輩の切ない死を憶いださせる。（高尾山健康登山の会々々長）

## 百観音霊場巡礼 (24)

厚木市 荒井 一雄

### 冬遊 佐白山

夕暮れに  
急ぎ参れる観世音  
参りて知るはみ仏のこころ

### 住職夫人教合掌

冬、佐白山（観世音寺）に遊ぶ

### 献灯継先祖供養

住職夫人は、金剛合掌（密教最高の合掌作法）を教へ、灯明を献ぐは、先祖供養に継がると悟される…

### 千手千眼十一面

千手千眼十一面観世音大菩薩を敬ひ拝し、経典を誦誦す、朗朗と…

### 敬拝誦誦経朗朗

敬ひ拝し、経典を誦誦す、朗朗と…

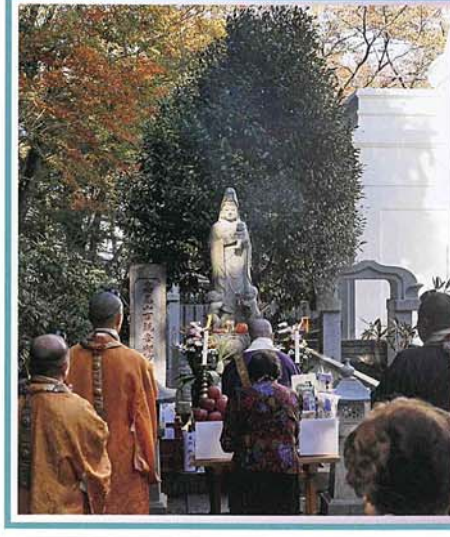
数年の間、全国をくまなく歩いて、不軽行（へまてを尊敬し、合掌して、つつしみ敬うこと）を行つたのでした。

その後、蓮円は夢の中で、鉄の城を見ました。不思議に思っていたら、そこに恐ろしい顔をした鬼が現れ、「ここは地獄だ。我は獄卒だ」と言います。そこで「母に会わせてほしい」と頼むと、鬼は城の戸を開け、猛烈な焔が吹き荒ぶ中から、あられもない酷い姿の母親を連れてきたのでした。

蓮円が母にすがつて泣くと、母もまた泣くに泣いて、こう言いました。「私は罪深く、地獄で言うようなない苦しみを受けてきた。だが、お前が私のために祈ってくれたお陰で、地獄を離れ、切利天に生まれることになったのよ」と。

蓮円は夢から覚めると、心が安らいで嬉しい気持ちになつていました。

（『今昔物語集』）  
蓮円は、母のために合



## 浅見家 子育観音法要厳修

十一月三日（金）

菅原道真『菅家文章』

掌し続けました。その思いは、清らかな風となつて、灼熱の奈落の底にも届いていたのでしよう。親子が再会した際に、母の涙は、息子への感謝の念だったに違いありません。香は禅心より出でて、火より出づることなし。花は合掌に開けて春に開けず

（良い香りは火から出るのではなく、乱れない心から生じる。花は春になつて咲くだけではなく、合掌によつて掌の花が開く。誰かのために手を合わせれば、冬の庭にも心の花がほころぶでしょう。か。芳しい春の香華をいち早く身にまといつつ、師走の道を歩んでいきたいと思ひます。

（栃木北部教区普濟寺）